其理之本原

第一篇

965 1/10

佛人ドルワールドンレゼー演説

日本林壽太郎筆記

眞理之本原

造物主之事

第一篇

小引

本書ハ曩キニ佛國人宣教師ドルワール、ド、レゼー氏ガ各地ニ於テ演說シタルモノヲ私ニ筆記シ置キタルモノ、中ヨリ取捨撰擇シテ第一篇ハ天主ニ關スルモノ第二篇ハ人ニ關スルモノ第三篇ハ耶蘇基督ニ關スルモノヲ分輯シ前後三篇トシテ刊行ス然レドモ素ト通俗ヲ旨トシ婦人小童ニモ解シ易ラシコトヲ欲シ務メテ口述ノ儘ニ存シ難澁佶屈ノ文字ヲ避ケタリ看者幸ヒニ言語ノ卑俚ト文字ノ平俗ナルヲ咎ムルナク理ノ存スル所ヲ玩味セバ蓋シ其益少小ナラザルヲ信ズ

明治三十年一月一日

筆記者　識

眞理の本原第一篇

目次

序言　一頁
第一　何故結果ありて原因なしといふか　七頁
第二　何故地上に生物あるか　十九頁
第三　何故太陽月地球等に運轉あるか　二十二頁
第四　何故世界万物に秩序あるか　二十六頁
第五　何故人間一般に神の思想あるか　四十一頁
第六　何故人間に無限の思想あるか　四十六頁
第七　造物主は如何なるものか　五十二頁
第八　造物主の全智全能なること　六十一

第九　造物主の全善なること　六十七頁
第十　造物主の攝理　七十三頁
第十一造物主と人間の關係　八十一頁
附言　神に就て諸種の謬說　八十六頁

眞理の本原第一篇　造物主の事

佛人　ドルワール、ド、レゼー演說
日本　林　壽太郎筆記

序言

諸君に對して私話するのは、今日が初めてですから、私の身上に就ては種々なれ疑を起すれ方もあらうかと思ひまする、如何となれば、私の如き外國人が、其本國を去て數千里離れたる日本國に態々渡て來て、氣候も違ひ、食物も變り、習慣も異なり、其上言葉も一向通ぜぬといふ樣な、さま〴〵の困難があるにも關らず、所々方々巡回して、自分の信仰する道を擴めたいと云ふは不思議ではないか、難儀苦勞は成るべく避げるが人情である、好んで難儀するものはない、シテ見ると宗教を擴めるの他に、何

か目的があるだらう、或は金錢を儲ける爲であらう、或は工夫を以て漸次日本國を奪取ためであらうと、斯樣にた考へなさるれ方もありませう、然し乍ら只一席のれ話を以て、斯樣なれ疑を晴すことは迚も出來ませぬ、ソンナれ疑が全く晴れるには、我信ずる道即天主敎の眞の意味が分らなけれどならぬ、天主敎といふ道は、凡ての他敎と大に違ふて、一言に申せど愛敎といふ、何故愛敎なるやといふに、現今世界に生息で居る人類は凡そ十四億六千七百萬人である、此多の人類は皆悉く同一なる神即御一體に在ます造物主に造られたものである、されど設ひ數千里を隔て海を異にし山を異にして生れ、容貌から言葉習慣に至るまで違ふといふても、同一本原から出たものであれど私も諸君も兄弟で厶る、四海兄弟といふは此謂だからで厶る、既に諸君が私の兄弟であるならど、私の善いと思ふ事は諸君にも知らせたいといふは人情ではありませんか、ッコで私の一番善いと思ふ事は何であるかといふに、即ち眞の道を信ずるといふことで厶る、何故また眞の道を信ずるが一番善いことであるかといふに、靈魂といふものは不滅のものでありますから、若し諸君方が誤謬の道に入たならど其害は獨り現世のみに止まらず來世にまでも及びまする、即ち死后終りなき禍を受けなければならぬ、何と恐しい事ではありませぬか、何うか諸君道理を以て少しくれ考へを願ひたひ、神といふものは是非とも唯一無二でなけれどならぬ、數多くあり、國に因て異なるといふ譯は決してない、神は此地球斗りでなく、太陽月星まで皆な悉くれ造りなされたので、日本の神、支那の神、西洋の神などゝ、ソンナニ小さく限られたものが何うして神でありませうか、神は此世界のみではなく天地萬物の主である、神が無遍絶對の御者でないならど、此森羅萬象を創造ことは出來ない、天地萬物の原因となることは出來ない、此故に眞の神は御一體であるといふは道理にして、二つ以上の神があるといふは不道理じや、意味のない說と云はんけれどならぬ、ッゥして眞の神が御

一体ならゞ矢張り眞の道も唯一つでなけれゞならぬといふ道理じや、即ち造物主御自身が垂訓られた道斗りが眞の道で、古來世界各國に行はれた數多の他教は人間の想像した誤謬の道と云はなけれゞならぬ、人間の想像説ならゞ之を信じても何の益もない、然らゞ神御自身が垂訓られた眞の道は何であるかと云ふに、其が即ち我天主教であると確かに信ずる、又た其證據も澤山ある、されゞ天主教の他の道は孰れも誤謬の道で、之を信ずるものは此上ない不幸なものであるから、其等の人々を眞の道に入れたいといふのが私の本願で、生國を離れワザ〳〵遠方の日本國に渡りたる次第でムりまする、私には此目的の外何もありませぬから、一刻も早く日本の人々を眞の道に入れたいと只管望みますけれども諸君の如き教外者は、未だ天主教の大体をも御存ないから、直ちに其委敷れ話をすることは出來ぬ、故に先つ其基礎なる點から徐々れ話せねゞならぬ、是非又た其必要がある、何となれゞ當時日本の狀態を見るに、概して云へゞ、佛教なれ神道なれ、其檀家信徒たるのは從來よりの習慣に繫がれて居るので、眞の信仰を持つものは僅かに一部の人丈けである、如斯無信仰の人々と云つても、心の底より神が無いと思ふ譯ではありますまい、けれども其行爲を見れゞ、神に對して、何の心配もなく何の務めもなく、又た設ひ神があると信じても、其神は如何なる思召なるかといふこと迄も知りたいと思はぬ、此世に働くのは徒に麵包の爲めのみである、一生涯僅か五尺の肉体を養ふことに齷齪して居る、如斯な人々は其行ひの上からは全くの無神教者である、言葉を換へていへゞ形而下即ち肉眼に視へる物に心を奪はれて、形而上即ち肉眼に視へないもの、就中神及び靈魂などの高尚なる問題に就ては一向頓着せなぬ、何と慨はしいことではムらぬか、諸君も失禮ながらソウだらうかと思はれます、斯樣に腹藏なく申上るのは、決して諸君に恥をかゝせるといふ積りではない、只無宗教といふことは人間の上に甚だ危險じやといふことをれ分りになるやうに致したい

熱心の餘りでムりまする、熟々れ考なさい無宗教即ち神に對して何の心配もせぬのと、宗教を奉じて神に對するの務を盡すのと、孰れか道理に合ふことであるかといふことを、尤も若し神が無いと云ふ證據を一つでも擧げることが出來たならば、幾分か安全にも思はれませうが、如何なる學者でも如何なる學問を研究しても、神が無いといふ證據は決して擧げることが出來ない、否な却て研究すれば する程、物理學にも動物學にも天文學にも、神が有るといふ確な證據を發見ます る其他哲學上から云ふも、萬民の心情を調べて見るも、神のあることは甚だ明かでムる、其故に昔より今日に至るまで世界萬國の高名なる學者等は皆な神が有ることを堅く信じて疑はない、サレバ神が無いといふは、總ての學問及萬民の心情に合はない說で、通常の人間より心情と智慧が拗戻たもの丶想像である、倍根といふ哲學者が、己れの利益の爲めを除くの外神無しといふものなしと曰れた通り、何か自分の爲にする所のものがあるから神がないと云ふのゝや、其爲にする所は即ち善なる義なる神を信ずれば己れの過誤及心情の拗戻汚濁を悔めなければならぬ、私慾を恣にすることが出來ない其故に神が無いと云ふのでムる。

第一　何故結果ありて原因なしといふか

吾人々類の如く智慧を具へたるものに對して、造物主の存在を說くに、是非とも證據を擧げねばならぬ、證據がなければ信ずることが出來ぬといふ程に、人智が昧むだとは、サテ〳〵驚くべく悲むべき次第では ムりませぬか、哲學者パスカル氏曰ふ、神の存在なくんば如何にしても森羅萬象の理を知るに由なし、然るに何故に神の存在を信ずるに其證を擧げるの必要あるか、と是蓋し人智の昧むだのをいふたのであります、若し人智明かなれば、決して證據を擧げるの必要がないのは、恰も光があるといふことを說くに證據立するの必要がないと一般である、吾人人間の智慧が斯くまでに昧くな

つたのは、抑何の故であるかといふに實に人間の情が捩れたからでムる、即ち人が神の存在を信ずれど、嫌でも之を拜み之に從ふと云ふ義務を生じて、人間が獨立することと吾儘勝手にすることが出來ない、是非神の全善なる法律を守り惡心を抑へ罪癖を矯正し善行をする、などの事に心配せねどならぬ、若し之に背けど罰せられる其が嫌じやに依て成可的神がないやうにしたいからでムる、斯く智や情が昧むだものですから、神の存在を說くに證據を擧げねどならぬ、ッウして若しも其證據に一點の疑はしいことがあれど、人々は直に其捩れた根情に引かされて決して信仰しないでありませう、依て私が之より擧げるところの有神論證は、皆學問上よりするので明かに且つ確かなるものでありますから、願くは諸君高尙なる心を以てれ聽き取りなさい。

サテ如何に無學な者でも、自然に曉る所の規則が一つある、其は即ち結果あれど原因あり末あれど其本なかるべからずといふことである、今人が船とか家とか若しくは機

械などを見て、之は偶然に出來たものであると思ふものがありませうか、決してない、必ずや人の手に成たと知るでありませう、船でも家でも機械でも造作人がなければ出來ないといふは明かである、煙の揚るを見て其下に火のあることを疑ふものは一人もない、故に出來たもの即ち結果があれど、之を造出したもの即ち原因がなければならぬ、と知るは別に考を要するまでもなく人々直に知るところの明かなる眞理である、故に之を自明の眞理といふ、ッウして世界の中原因なくして出來たもの何かあるかといふに、其一もないことは自明の眞理に因て明かに知られる、試みに世界萬物を視よ、天には日月星の大なるを始め、地には海陸山川草木禽獸人間の小なるものに至るまで、其數擧げて數ふべからざる程である、然れども此夥しき萬物の中、一つだも偶然に在るもの即ち原因なくして存在するものはありますまい、原因なければ草一本はれろか濱の眞砂の一粒だに在ることは出來ませぬ、然らば即ち此天地萬物なる結果の原因は

何であらうか、草木は吾其種より生ずるを知る、禽獸は吾其親より出るを知る、水は吾其酸素水素より成るを知る、然れども其種其親其酸素水素が抱合する第一原因は何であるか、斯の如く推究れど如何しても吾人は其大原因なるもの、原因なき原因、即ち無遍絶体なる神に到達しなければなりませぬ、孔子が其末を見て其本を知ると曰ふた通り、天地萬物といふ末を見て之を創造し給ふ本なる造物主を知るといふは、苟も狂者にあらざるよりは承知しなければならぬことでは厶らんか、以上は人々自然に曉る所の規則即ち自明の眞理に依て證據するので、如何に無學なる人でも造物主の存在を信ずるには此簡單なる證據のみで充分で厶りまするが、私は尙進んで學問上から證據立てませう。

凡そ如何なる學問でも、深く研究すれど益造物主の存在は明かで厶ります、實に倍根が膚淺なる學問は人をして益神を遠ざからしめ深遠なる學問は人をして愈神に近かしむ、と曰れた通りで、吾人は學問を研究して愈造物主の存在の疑ふべからざることを知るのである、前に擧げました所の、原因結果の眞理は自明にして、人々自然に曉り無知無學なる嚚薨雉兎の輩までも皆承知致しまするが、其のみならず此規則は實に總ての學問の土臺で、如何なる學問も皆此規則の上に立つて居るもので厶る、何となれど學問とは萬物の現象を研究して、其狀態其規則其原因を知るといふことである、ソコで凡ての現象は何であるかと云へど、皆或原因の結果である、之は最も明かなることで若し之を打壞したならど凡ての學問は忽ち無くなつて仕舞まする、分り易い例を申さど、茲に兇器を以て殺されたるものがあるとすれど、之は結果であるから其原因かなければならぬ、然し其原因は他殺であるか自殺であるか、若し他殺なれど謀殺なるか故殺なるかと、斯やうに其原因を細かに調べるといふは、法律家の任で厶りませう、ソウして之が明細に分れど擬律の錯誤がない、又茲に病氣なる人があれど、是亦矢張

結果であるから其原因がなけれゞならぬ、之を究めるのが醫術で其原因が明かになれゞ病は癒し易い、又百姓が不作なれゞ其因原を調べて、風の爲か雨の爲か或は害虫か肥料か地味に合はぬかと知るのが農業の目的で、之が分れゞ不作は少い、佛蘭西のパストールといふ學者は、蠶病の原因なる微粒子を發見して大に蠶業に利益を與へた、總て皆事々物々此通りで、出來事即現象は結果である、故に其原因がなけれゞならぬ、之を調べて其原因の何なるかを知り、又た其現象の因て來る方法規則を辨へるといふのが、即ち學問で學問の世に益あるも是が爲で厶る、之に由て觀ますると、凡ての學問は、結果あれゞ原因あるといふ規則の上に立てられたことは明かで厶りませう、尙又進んで高尙なる學問に至りましても、矢張同じで、ッマリ結果を見て原因を尋ぬるのである、只高尙に進むに從つて其原因が分らない、今日に於ては、未だ現象の本原因を知つたことは一つもない、蓋し人智に及ゞぬことで明かに分ることは出來ないこ

とである、即ち如何にしても其本原を物質内に發見ことは出來ないのである、故に學者は現象の方法を解く爲に想像を以てする、而も其想像に何の證據もない、否な證據なき想像といふのみならず、總ての學者等が承知する想像說の中に道理に合はぬことさへもある、即ち物質の性に合はぬ想像がありまず、けれゞも今日に於ては其他に現象を解く方法がないから、止むを得ず道理に合はぬ想像と知りつゝ、暫く之に依て以て理象を解明して居るのです、先づ一二を擧げますれゞ、風とは何であるか、空氣の流動である、其原因は如何、熱である、即ち總て物は熱に遇へゞ膨脹する、空氣も同じく熱に遇ひて膨脹し輕くなつて上に昇る、上に昇れゞ近傍の空氣が其後を補はんとして此に流動が始まる、是即ち風である、されゞ風といふ現象の原因は熱である、然れゞも熱も亦た一の現象に過ぎない、故に結果である、然らゞ其原因は何であるか、此に至て少しも分らぬ、物理學者は之を解明す爲に珍しい想像をした、即ち萬物の中に吾

人の目にも觸れず手にも感ずることの出來ない一種の氣体があるだらうと想像して、其想像物をエーテルと名づけた、而して熱は此エーテルの震動であると解明します、其他光、越歴も矢張此エーテルの別なる震動だといひます、成程エーテルといふ氣体が實際にあるとすれば熱、光、越歴などの現象を解明すに便利である、幾分か分り易い、雖然エーテルなるものは、今迄見たことも感じたこともない、ツマリ實驗したことのないもので、其性質其力作用などを研究することの出來ないものである、其有無全く分らぬ想像物である、斯く證據なき想像物といふても總ての學者は止むを得ず之を有るとして解明して居るのでムります、シテ見ると物理學に於ける多くの現象の解明は或は虚偽なるやも知れぬ、尚又天文學に於ても同じことがある、先づ宇宙にあらゆるものは悉く運轉する、月は地球の周圍に運轉し、地球は又他の七つの行星と共に太陽の周回に運轉し、太陽は又是等八つの行星を將いて他の星の周圍に運轉して居りまする、

只其星は何處にあるか分らないのです、雖然太陽がヘルキュルといふ星宿の方向に、非常な速力を以て進むといふことは最早疑ひない、之を以て見ると、萬物は各相關係して運轉するといふは明かである、而して運轉とは一の現象にして即結果である、故に其原因は何なるか之を知らなければ此大なる運轉を解明すことは出來ませぬ、所が茲に今より二百五十五年前、即西暦一千六百四十二年英國に生れたる牛董といふ大學者は、之を解明す爲に、凡て物は皆相互に引く力を有つて居ると想像し、之を引力と名づけた、而して其相引く力は物の量に正比をなし距離の自乗に逆比するものであると知つた、之を引力の規則といふ、此規則を以て凡ての運轉を解明せば成程大に分り易い、又天文學上の總ての計算はよく此規則に箱つて居る、之を以て學者は皆此引力を以て天文學の土臺と致します、然し引力が如何に天体の運行に能く當るも、素是れ想像に過ぎない、猶又深く考ふれば、之は道理に合はぬことで、迚も人間の智慧に分ら

ぬ、何故なれど引力は全く離れたる二物の間に働く力である、例へば太陽と地球とは凡そ三千八百萬里離れて居る、此大なる距離に在る太陽が地球を引くといふならば、太陽其ものは其体の在らざる所まで働くと云はなければならぬ、左様な働は人間は勿論造物主までも出來ないかと思はれます、元來働とは働いて居るといふ意味である故に働く其物の在る所にのみ出來ることで在らざる所に働いて居るといふことは決して出來ぬといふは眞理である、是は漁者樵夫までも承知できる明かな論ではありませんか、是引力説の眞理に合はぬ一證で厶る、次に高名なる哲學者にして海軍の役人なるド、ブロクグルがいふ如く、若し引力が眞實に有るものとせば、靜止する二物も其相引く爲に運動を生ずる、然らば運動は靜止より出ると云はなければならぬ、是は物皆惰性なりといふ物理學の明かなる規則に背く、〔惰性を論ずる章を看よ〕又部分より全体を出すこと能はず小は大を生む能はずといふ哲學の原則に反することである、諸君はコンナ話をば聽きなされて驚きなさるかも知れぬ、天文學者が一般に承知する規則を批難するなどゝは恥を知らぬものゝ云ふことであると思ふかも知れぬ、雖然決してソウでない、是は私の論ずることでない、引力の規則を始めて想像した所の大學者牛頓自らが曰ふたことで其著書に左の如く記してある、或物が全く離れたる眞空間に何の媒介もなく働くやうに物質が引力を有するといふ説は、決して物質の本性に合はぬことにして餘りに愚論とせねばならぬ、幾分でも哲學の智識ある人に於ては決して信じられぬ、故に吾は萬物の運轉を解くに當りて、萬物は眞實に引力を有するとは云はず、只引力を有するらしく萬物が運轉するといふのみと、以上申上る如く如何なる學問でもあらゆる現象の中只一つ丈も其本原の分つたものはない、此故に彼の無宗教家なるスペンセルまでも云ふた、凡て定義原則なるもの、例へば時間、空間、運動、力等は、其性質及其相互の關係を知ることは、人知に及ばざることで畢竟不可知的に屬する、と

之を以て見ますると如何程深い學問でも、物質のみを以て考へ、物質以外に存する力即造物主の力といふことを除いたならば、決して此宇宙間の森羅萬象を解釋することは出來ませぬ、故に森羅萬象の本原を知りたいならば、何うでも原因なき原因、始め終りなきもの、無遍絶對なる造物主を知らなければならぬ、換言れば世界萬物は皆始めあるものにして、全能なる造物主に何もなき所から造り出され、又其働き即ち運轉、光、熱、越歴などの凡ての現象も、矢張造物主の御力で出來ると云はなければならぬ、是天地萬物を創造又始終之を宰り給ふ造物主のある明かな證據ではありませぬか、天文學者ヒルヌが著したる萬物の組立といふ書に、正直なる學者の爲には造物主の存在するといふことのみならず其主宰することまでも、數學幾何學の定義に於ける如く明にして近世學問の結論なり、と記してあります、何と諸君斯く高尚なる論證を聽きなされても、まだ造物主の存在をれ疑ひなされませうか。

第二　何故地上に生物あるか

次ぎは死物と生物の差別より出る證據です、御存の通り死物とは金石水空氣等の如き生命なく活きて居らないもの、生物とは草木禽獸蟲魚人間等の如き生命ある活きて居るもの、ソウして是等の生物が死物なる金石類から出來る筈はなひ、何となれば死物といふものは生命がない、己れに無い生命を他に與へることは決して出來ないといふは分り切たことで論ずるまでもない、ソコデ天文學や地質學を調べて見ますると、吾儕の今載て居る地球といふものは、最初其出來始まつた時には今日の如く固まつた球ではなく、彼の太陽の如く火の燃へて居る球であつたのでムる、其火の球が表面から漸々冷却凝固て殆んど皮のやうなものが出來た、地質學者は其皮を五つに分けます、之を地層といふ、ソウして其皮の最も深い所即ち一番下の地層が最も始に固まつた部分で、其所を學者は無生地層と名けた、何せならば其地層の中には少しも生物の

跡を發見ないからでムる、其上の地層を第一地層といひ、其より順次第二第三第四地層といひまして、第四地層が最も淺い地層即ち一番上の地層である、ッコで前申た無生地層の中にある礦物類を調ぶれど、此地球が初めに火の球であつたといふ事は確かである、是に就て疑を懷く學者は一人もムらぬ、サテ右の如く地球が往古に火であつたならば、其時には人間は勿論草木禽獸蟲魚に至るまで此地球の上に生息て居らなかつたと云ふことも矢張疑ないことでムる、高名なるキュヴェーが申されました、地球に始めより生物のあらざりしと云ふ事は如何にも確實なりと、其のみならず地質學者に取つては、五つの地層の中何の地層から生物が在り始めたといふ事を知ることは極く容易ことでムる、然らば今日世界に生息て居る所の草木禽獸蟲魚人類等は何うして生じたものであらうか、何處から來たものであらうか、前申上た通り地球は元と金石水空氣等の如き死物でありまして、決して生物に生命を與へる力がない、之に由て觀るときは、是非とも地球の他に或る原因がなければならぬ、即ち大なる能力が有つて活きて居る御者が草木禽獸蟲魚人類をれ造りなされ、又た彼等に生命を與へて地球の上にれ載せなさつたと申さなければならぬ、尙ほ分り易い例を以てれ話致しませうに、諸君の日々の糧食なる米は、昔より確固不動規則に從て年々歲々必ず稔ります、即ち種を地に蒔けば漸々成長して花を開き實を結び再び前の米を得る、然しながら若し種を地に蒔かなかつたならば決して生へない、是れ地は草木を成長させる養ひを供給も新たに生せしむる力がないからでムる、故に今世界にある所の米を悉く滅して一粒も殘さないならば、其種類は全く絶へて世の終りまで地上に生へることはありますまい、此時に當て米を得たいならば、是非とも世界の他から其種を求めなければならぬ、此理は獨り今日斗りでない世の始めに於ても同じことしや、地より自然に米が生ずる譯はない、必ず他より種が來なければならぬ、シテ見ると總ての生物のある前に造

物主が在らせられ其御ものが生物の種をれ造りなされ、ソウして是を地に蒔けど成長して花を開き實を結ぶといふ規則をれ定めなさつたといふことは何よりも明かな話ではありませぬか、ソウして其御者が拉丁語にはデウスといひ、英語にはゴッドといひ、日本語にはカミといひ、漢語には天主或は上帝若くは造物主といひまして、名は國に依て異なりまするが畢竟其指す御者は同じでムる、以上申述べた所は地質學上から立てた證據で甚だ明かでムります、西洋の無神論者が此證據を打潰したいと思ふて色々心配致しましたが、遂々其骨折は徒勞でムりました、將來とても同じこと、如何程造物主が無いやうに去たいと心配しても、眞直な智慧を以て研究したならば却て其存在を認めねばならぬ、昔羅馬のシセロといふ學者が、造物主の在るといふことは恰も太陽が日々世界を照すといふことの如く明かなりと曰はれた通りでムりまする。

第三　何故太陽月地球等に運轉あるか

或先生が、世界萬物は恰も書籍の如し、書籍は之を見て以て益其理を明かにし、萬物は之を見て以て愈造物主の存在と其全能と全智なることを知る、と曰れましたが眞に其通り、吾儕が萬物を見又之を研究すれば、何うしても造物主の在ることを疑ふことは出來ませぬ、今茲に一例を擧げてれ話し致しませう、先づ物理學上學者等が天地萬物を調べて見て、動すべからざる定論が一つ分つた、即ち凡そ有形なる物質は一たび動さるれば始終動いて己れの力を以て止まることは決して出來ない、又た止つて動かないものなれば始終動かずして己れの力を以て動くことは決して出來ない、之を物質の惰性といひます、例へば今机の上に石を置きませうに、若し他から之を動かさなかつたならば、其石は何萬年たちましても決して自ら動くことなく何時も同じ所にジット居るでムりませう、若し又た其石を取て投けたならば、際限なく投げられた方に進みまする、決して自らの力を以て止まることは出來ませぬ、尤も是は一寸考へると

實際に合はぬやうじや、何せなれど石は如何程強く投げましても、直に地に墮ちて動かぬやうになるからじやが、然しこれは石自ら止まつたのではない、空氣が其石の進むを障碍し、又た地球の引力が其石を下に引きつける此二つの力が止めるのでムる、此故に多くの學者は惰性は物質の性質であると申ます、是は物理學上疑のない定論で世界各國の學校に敎へる所の規則であります、サテ此規則に依て見ますると有形なる世界萬物が動くのも、或は動くものが止まるのも、皆な自らの力でなくて他から受ける力であります、ソコデ天文學に依て見ると彼の渺々たる蒼穹の中に、驚くべき程大なる運轉が行れつゝある即ち地球に一番近い處に月といふものは、二十九日十二時四十四分二秒を以て吾儕の戴て居る地球のグルリを一度廻る、其速力を計算して見れば一時間に八百四十里づゝ進むといふ、實に早い運轉ではありませんか、又た吾儕の戴て居る地球は是よりも尙ほ一層早く運轉する、即ち地球は一秒の間に七里半餘一分に四百六十里一時間に二萬七千六百里の速力を以て進みつゝ太陽のグルリを一年一度だけ廻る、之れ實に驚くべき事ではありませんか、地球の周圍は一廻で九千里程ある大なる球でムる、此大なる球が一時間に二萬七千六百里進む、即ち最も大なる大砲の彈丸よりも四五層倍早く進むといふことは實に感心ではありませんか、如斯早く地球が運轉する爲めには如何程強い力を用いなければならないか迚も考へられない、天文學者でもソンナ計算は迚も出來ませぬ、尙又月地球斗りでなく總ての行星から太陽に至るまでも皆悉く運轉いたして居りまする、太陽はヘルキュルといふ星宿に向て進むで居るといふことは最早只今は明かに分つて來た故に、學者等は萬物の中に運轉しないものは一つも無いと考へまする、斯樣に萬物の運轉するは何故でムりませうか、前に申た通り有形なる萬物は皆惰性にして己れの力を以て運轉することは出來ないといふ規則である、然らば誰れが運轉させまするか、是非とも有形ならざるもの、即ち

無形にして活きて居る御者が御自分の力を以て運轉させなければならぬといふことは疑ひありませぬ、其御者が即ち神でムりまする。

第四　何故世界萬物に秩序あるか

諸君が上野の博物館及圖書館に入り御一覽なされた時に、最も目を惹くものは何でムりませうか、先づ其秩序整然たる所でムりませう、即ち同種類なる物は悉く一所に陳列して、陶器の間は陶器類を集め、武具の間は武具類を集め、決して彼是混交て居りませぬ、又圖書館に於ても其通り、歷史の書と幾何學の書と混じて置くやうなことはなく、學問の種類に依て其藏する萬卷の書籍も皆其々分類されて居る、尙其上にも一々明細に其題名を記したる札がある、故に入用の書籍は立所に之を辨ずることが出來ます、實に感心の外ムらぬ、ソウして斯く多數のものが少しも混雜せぬやう取方附て置くといふは、隨分心配と手數の懸ることです、其のみならず才智あつて能く考へる人でなければ出來ないことでムりませう、今東京中の人々のうち斯やうな仕事の出來る人が幾人ありませうか、實に少いでムりませう、然るに茲に或博識先生があつて、意氣傲然と博物館圖書館の秩序整然たるを感ずる人を侮り、汝は憐むべきものじや、斯く種々なる品物書籍が其々分類して陳列され少しも混雜せぬといふは、別に智慧ある人がすることでない、之は自然に出來たことじや、吾の如く近世の學問を研究したものゝ目から見れば、彼の多くの品物の原子（アトーム）は物質固有の力の作用に由て自然に方附けられたものじやといふことを知て居るから少しも感心するところはない當然じや、なぜゝいふたならば諸君は何と思ひなされますか、其先生が如何に近世の學問に達したる大先生といふても狂氣の沙汰とするでムりませう、今活眼を開いて世界萬物を見よ、其秩序整然たることは豈に博物館圖書館の比でありませうか、彼の器物書籍は死物にして自ら動かざるものである、故に人一度之を整ふればイッモ其通

りにして決して變らない、然るに此世界萬物は凡て皆な運動するものである、太陽地球行星を始め總ての星は皆悉く驚くべき速力を以て運轉する、地球には又活物があつて種々の働きをする、換言れば世界萬物は運動を以て滿されて居るといふてもよい位である、然るにも係らず此等の萬物が少しも混雜せぬやう各秩序を保つて居るといふは、之は眞に感服すべきことでありませんか、此秩序整然たるを日々夜々に視ても別に大なる智慧あるもの即造物主のあるでなく偶然に出來たるものだといふ無神論者は、如何に意氣傲然たるも如何に近世の學問に通じた積りでも、前の大先生よりも一層ひどい癲狂者に相違ない、斯やうな無神論者は却て近世の學問を知らぬ虛僞の學問皮相の學問を學んだ丈で眞理を解せぬものであります、私は前の演說に天文學者ヒルヌ氏の言を擧げましたが、今又茲に再び繰返しませう、曰く凡て正直なる學者は造物主の存在を知る是近世學術の結論なりと、私は是より世界萬物の秩序其整然たる狀態、其旨く立派なる樣子を種々の學問に由て知らるゝといふことを述べて、ヒルヌ氏の言の僞りならざることを證しませう。

先づ凡ての學問に由て見ますると、世界萬物は完全なる秩序を有つて居り、又微少も變らないやう確かり極つて居るのです、御存の通り太陽系に屬する球、即ち太陽を中心として其周回を運轉する行星は、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星の八つである、此八つの球が太陽と離るゝこと、及其速力其軌道其廻る時間などは、各違ふて居る、例へば水星は太陽に最も近いもので、其平均の距離は凡そ五百萬里、其太陽を一周するは三ヶ月であります、其次は金星、其次は地球である、地球は其距離凡そ三千八百萬里（軌道は皆な楕圓形を爲す故に其距離は總て平均を云ふ以下同じ）にして、其太陽を一周するは三百六十五日と五時四十八分四十九秒、七である、一番遠きは海王星にして、其距離凡そ十一億千二百萬里で殆んど地球の距離の三十倍に當る、其太陽を一周するは百六十

四年と二百八十一日である、天文學者は皆此通り八つの行星の軌道、其一周する時間まで明かに分つた、ソウして始めより今日に至るまで厘毛の變りも誤りもなく全く同じ速力を以て同じ軌道を運轉して居る、決して凡そ此位の時間に此邊を運轉するといふやうなことでないのです、一例を申さゞ地球は凡そ三百六十五日で太陽を一周するといふことでなく、全く三百六十五日五時四十八分四十九秒七を以て太陽を一周するので、秒數までも違はぬ、否々秒數どころでない秒の十分の七といふ斗られぬ程僅少の時間までも違はぬのである、是は今を去る二千年前からの研究に依て明かなことであります、斯く秒以下の僅少の時間まで違はないやうな時計を造ることが、人力に及びませうか、迚も出來ない、彼の東京神戸間を往復する汽車を御覽なさい、其距離僅に二百里に滿たぬ、其速力僅か一時間に十里進む丈である、此道程と其速力とを、彼の行星に比べて見たならゞ如何でせうか、實に大層な違ひでムりませう、然るに東京神戸間を往復する汽車は、其半數か少くも三分一丈は延着するのがある、軌道に破損がなくとも、何かの障碍があつて、一ケ月と續いて全く一定の時間に發着したことは嘗てありませぬ、ないと云ふても汽車の發明を以て、斯く東京神戸間の二百里の道程を日々往復することが出來るといふは、感心すべきことである、又是を取扱ふ人も餘程熟錬して居らなければならぬ、然るに地球の進むは一時間に十里位のことでない、一秒間に凡七里半進むのである、斯やうな速力を以て一年間に何百億萬里の遠き道程を昔より今日まで一秒以下の僅かな時間までも誤りなく運轉して居るとは、實に驚くはゞ感心なことではムらんか、如斯完全なる秩序を保ち確かり極まつた運轉をするのを見て、尚偶然に出來たと云ふやうな先生があらゞ、ソレは實に險呑ですから早く風癲病院に入れなさい、吾々は細かに研究すれゞする程、世界萬物は全き秩序確き秩序を有つて居ることが知れる、四季は毎年定まつた日に遷り、同じ現象は同じ時節に

一變りなく現れ來ます、冬に至れば草木の多くは落葉して眠るかの如く、春暄風暖なる時に至れば忽ち醒めて、葉を生じ花を開き、夏に實を結び、秋に熟する、又麥の如く早熟もあり、稻の如く晩熟もある、梅は五月に其實熟し、柿は十月に其實熟す、如斯現象は世界開闢の始めより今日に至るまで、數千年の久しき年々歲々同じである、是豈に感ずべき秩序では厶らんか、又彼の定風を見よ、定風とは何月より何月に至るまで全く同一の方向に吹く風である、日本と赤道との間に於ては、此風は四月より十月に至る西南より東北に吹く、故に帆前船にて日本に航するには最も好時節である、又十月より四月までは東北より西南に吹く、故に日本より南方に航するには好時節である、ソウして年々極つて此通りであるから、水夫は能く之を知り此風を利用して目的地に往く、是亦た矢張感心な秩序では厶らんか、猶又是よりも一層感心するのは、日本にある入梅といふことで厶る、入梅の節に雨の多いは米を作る國のみに限つて居るのです、是は米を作る爲に入梅があるかと思はれます、何故なれば西洋諸國には決して入梅の節に雨の多いといふことは一ケ國もありませぬ、是は亞細亞諸國のみに限るのです、殊に感心なるは入梅の節が丁度苗の植付頃に當るといふことで厶ります、日本に於ては五月頃が入梅の節で、赤道近傍の國々、即ち東京安南などは二三月の頃に當ります、是が偶然にあることゝ思はれませうか、否々米を以て常食とする國國を助けやうといふ難有聖慮に依て、造物主が特別に斯る規則を定め下されたと思ふのは、實に道理なる考では厶らんか、猶又鳥魚類を見れば如何、彼等の中には毎年極つた時節に當て海を隔つる遠方なる國へ場所替をするのがあります、ソウして珍しいことには、彼等は各々別々に渡るでなく多數集つて渡ります、例へば燕は春に當て南の方から來る、故に燕の來るのは春の時候の徵で、秋になれば復び南の方へ往く、其他雲雀、鴫、雁なども年々同じ時節に來たり、同じ時節に復る、魚も同じで鰯、

鯡、鱈などは矢張年々極つた時節に同じ道を集まつて往來する、故に新潟邊には夏の始めに鰯の漁が澤山あり、却て上總の九十九里邊は冬の最中に鰯の大漁がある、其時節には海岸が賑しく迚も食べ切れぬから、干鰯として肥料にする、是は諸君よく御存の所で厶りませう、諸君よ鳥魚の如き智慧なき動物が斯く四季を辨へて渡るべき時節を知り、往くべき道を間違はぬといふは、是又實に感服すべき秩序では厶らんか、世界萬物總て皆此の通り、完全なる秩序を有ち、旨く組立てられて居る、然るに人間は智慧淺く、兎角唯利是奔るところの慾心に引かされ、少しも思慮がないから、不斷眼に觸れるものは視慣れて少しも感服を起さぬといふ癖になり、狗や猫が高尚なる美術品を視る如く、此感服すべき天地萬物の有樣を見ても一向感じがない、況して其原因を究めたいなどゝいふは思ひも付かぬことで厶る、是は實に人間としては恥ゲ敷次第ではありませんか、人間は造物主より考ふべき智慧を賦べられて居りながら、造物主の感心なる所作又其深き恩を考へず、甚しきに至ては此完全なる秩序を見て之を爲さしむる原因なく、偶然に出來たものじやといふ利心の振れた人間さへもある、實に憐むべきものでは厶らんか、以上申上たる如く世界の秩序は實に完全であるが、其斗りでなく人間が如何に力を盡しましても決して此秩序を亂すことは出來ないほど確固と極つて居ります、只時として工夫を以て天の規則に逆らふて幾分の變りを生せしむることが出來る、雖然ソレは逆らふて居る間だけで、直に元に復ることは猶ほ彈器を手にて押へたる如く其手を放すと同時に元に復つて仕舞ます、今茲に禽獸の種類に就て一例を擧げれど、彼等の種類は全く異なりで定められたるものですから人間が如何程工夫致しても決して之を亂すことは出來ませぬ、例へゞ狗と猫とは全く異種類故人ありて無理に交尾たならゞ或は出來ることがあるかも知れぬ、けれども決して子は産れませぬ、馬と鹿、熊と虎に於けるも皆同じで厶ります、然し其種の最も近さもの

即ち馬と驢の如く殆んど同じ種類のやうなものは、交尾することが出來る、尤も野獸なれどたとひ同じやうな近さ種類でも自ら交ることは決してないのです、ソコで人が工夫して牡馬と牝驢とを無理に交尾たならば子を產む、之を騾といひます、シカシ騾は常に子を產むことはない、只五六度斗り子を產むことがあつたといふ、ソウして騾の子即ち二代目の騾は、最早子を產むことは一度もありませぬ、畢竟騾が孳殖して其種を繼續することは出來ないのであります、如斯交尾て子を產む程に近い種は實に少ない、私は種々書物を調べましたが僅かに四つだけ分りました、即ち馬と驢、羊と山羊、狼と狗、及び穴居する兎と、穴居せざる兎であります、私は此四つの外未だ見當りませぬ、ソウして又或ものには其種が澤山あるのがある、例へば狗に大なるもの、小なるもの毛の長さ、短さ、白さ、黑さなど樣々であります、けれども元全く同じ種で、人間の心配に依て樣々の差ひが出來たのである、故に之を捨て置いたならば遂には其元の種に復ります、無理に出來た色々の差ひが無くなつて仕舞に相違ない、例へば家に飼はる、狗と山に棲む狗とは其吼方全く違ふ、然るに飼狗を人なき島などに捨てれば僅の間に其吼方を失ふて山に棲む狗と同じに歸る、是に就て珍しい經驗がありました、西歷一千七百十年に當つて西班牙人が亞米利加の近傍にあるシュアン、フェールナデズといふ無人島に、山羊が餘りに澤山棲むで居て困つたから、之を殺させる爲に狗を多く放つて置きました、其より三十三年後即ち一千七百四十三年に當て、西班牙の海軍艦長ウルロアといふ人が、其島に往きて前に放つたところの狗が其吼方全く變つて山狗の如き吼方になりましたから、其中少しく連れて西班牙國に歸り飼狗と一所に置きました、すると彼等は飼狗の吼るを聽いて其如く擬似やうとしたが出來なかつた、ソウして飼狗と全く同じに吼へられるやうになる爲に、隨分永き年月であつたといふ、牛馬猫などの總ての家畜獸は皆な是と同じで、人間に離るれば其本なる野獸

に復へること疑ひありませぬ、昔北亞米利加には馬がなかつた、故に歐羅巴から持つて往つて野山に離しました、所が其丈其毛色までも悉く野馬の如く鼠色に變りました、又豚は本野猪より出たものですから、山に放せば直に野猪の如く其耳は立ち、又產れて六ケ月間は野猪の子の如く黃色の班條が頸より尾の際まで並んである、鳥も矢張同じで、鶩は本鴨より出たものじやが、鶩には純白なものがあつて鴨には無い、然し若し鶩を放したならば漸々其純白色は變つて鴨の色に復る、シテ見ますると全く異りた る種は確く極つて居つて、人間が微少でも混亂ことは出來ない、馬と驢、狗と狼の如く最も近い種の間には幾分か混亂ことが出來るけれども、僅かに一二代に止まります、又同じ種には色合、毛狀、形狀などは人の心配に依て變らせることが出來ても、決して種を變へることは出來ない、故に人が心配を止めれば程なく本に復つて仕舞ます、之に由て觀れば禽獸にも亦た堅い規則があるのである、是は實に感心な秩序では山らん

か、今申上る所は幾度も學者等が仔細に經驗して研究したことで山る、ダルヴヰンまでも格別鳩に就て經驗した、即ち家鳩、野鳩の類には其異なりたるものは百五十種もある、之を色々經驗して、其本はどぜといふ一種より出たものであることが分つた、右種々の例を以て視れば「ダルヴヰン」の唱へた進化說の大に誤つて居り、近世の學問に合はぬといふは明かでは山らんか、又禽獸の異種類の間より孳が產れて其種を繼續することが出來るといふ證據なき中は、ダルヴヰン說は捩れた智慧の想像に違ひない、此等の經驗が明かになつたから、西洋各國にダルヴヰン說は大に勢力を失ひ、今之を贊成する人は剛情なる半熟先生斗りで山る、然るに日本國は遠く離れて居りますから、總ての事が何うしても遲れ勝である、故に彼說を贊成する學校の先生が多い、然し十年若くは二十年の後には餘程少くなること疑ひありませぬ、サテ今迄述べました所は禽獸に就てのみであるが、草木の類にも矢張同一の規則がある、人參の種を幾度蒔て

も惑の生へることは決してない、人力を以て草木の種を亂すことは迚も出來ぬ、さりながら矢張禽獸と同じく或種に就て其外形丈變ることが出來る、例へゞ日本に於て園丁などが、工夫を以て菊とか牡丹とか薔薇などの種を際限なく殖すかと思はるゝ程年を追ふて殖します、けれども本一種から出たものでありますから、人の手を離れて野山に捨て置くならゞ程なく其本なる一種に復ること疑ひない、是は園丁などが知る所でムりませう、シテ見ますると草木には完全なる秩序があります、以上論ずる所に依て、宇宙萬有は太陽行星より、地球上に於ては其四季の循環より定風入梅等の種々の現象及禽獸草木等に至るまで、皆悉く旨く組立てられ、完全にして確固たる秩序を有つことが表はれて居ります、ソウして秩序あるものは智慧より出るの結果である、智慧なければ決して出來ぬ、秩序あるものは智慧より出づとは哲學の定則である、されば世界萬物の完全なる秩序を見ても、偶然に出來たといふて、無遍なる智慧を具へたまふ造物主の爲し給ふたでないといふ説は、全く智も情も捩れたる人の想像にして、近世の學問に全然反對する説でムります、諸君は何うか、正直な心に從ふて萬物を創造し、組立て給ふた、無遍なる造物主を堅く信仰なさるやう希望致します。

第五　何故人間一般に神の思想あるか

ダヴィド王の詩に、愚なるものは心の中に神なしといへり、と書いてありまする通り、狂妄者を除くの外如何なる惡人でも心から神がないと思ふ人はありませぬ、彼の惡逆なる文學者ヴォルテール、ディードロの樣な者でさへも、造物主のあるといふ事は餘りに明らかですから之を無いと云ひ黒めることは出來なかつたのみならず却て其在るといふことを立派に證據致しました、即ちヴォルテールが曰ふのに時計が計時師に造られたることを證し家が工匠の手に成りたることを證するに、何故獨り天地萬物が絶對なる造物主より出たることを證せざるか、一本の樹、一匹の獸、一個の星を見て、

何故プラトンが無上の幾何學者と讃美したる造物主の跡を顯はさずといふか、若し世界萬物にして造物主の存在を顯はさゝるものあらむ其一つにても之を擧げよ、未だ今日迄一つも之を發見こと能はずと、又たディードロが曰ふたのに、人間に思想なしと云はゝ人之を愚說なりと笑はん、然れども萬物の中只一匹の小さき蝶の翅に顯はれたる智慧の徵表を見て之を造りたる智慧を認めずといふは、人の言行に顯れたる思想の徵表を見て之を爲さしむる思想を認めずといふよりも尙一層の愚說なりと云はざるを得ず、昆虫一匹の体の構造が顯はす所の智慧と秩序は人間が其言行に顯はす所の智慧と秩序よりも小なりとするや、ニュートンの智慧がニュートンの著書に顯はるゝ如く、造物主の智慧が彼の昆虫の眼一つの中に顯はれざるや、世界萬物を說明すに由て學者の智慧が證せらるゝことよりも、創造せられたる世界萬物が其創造者の智慧を證することの弱さや、嗚呼世界萬國恐らくは如斯考ふる狂妄者は一人もあらじと、諸君よ斯樣に巧みにして而かも眞なる有神論が、ヴォルテール、ディードロの如き天主敎に太く反對したる天主敎を酷く誹謗たるものゝ口から出たとはナント奇らしい事ではムらんか、之を以て見ますると、口には神が無いと云ふても、心から神が無いと思ふものは狂妄者の外なからうと思ふ、學問や智慧の優れた人ほど明かに神のあることを信ずる、然しながら神のあることを知るのは學者智者でなけれどならぬといふ譯じやない、學者が其深い智慧を以て世界萬物を調べて造物主を信ずること、文盲者が其淺い智慧を以て萬物を見て造物主を信ずること、聊かも違ひはムらぬ、昔し亞剌比亞の沙漠に住む或る野蠻人に、汝は何に由て造物主を信ずるかと問ひましたに、野蠻人は答へて、沙の上の足跡を視て其鳥なるか獸なるかを明かに知る如く、天地萬物を視て造物主あることを明かに知れりといひました、之に依て觀れど野蠻人と文明人とに係らず、學者不學者を問はず、神を信ずることに於て何の違ひはムりませぬ、次に又御

一体なる造物主を信ずるといふことは新しい事であるか、近世斗りであるかといふに、決してソウでない、昔より外教の國、外教の人に之を信じたものが澤山ある、殊に昔にあつて天主教信者でない有名な人、十九世紀の今日から哲學者と稱せらるゝ所の人々が、造物主あることを堅く信じたのみならず之を信ずることの、人間にも社會にも必要なることを曰れた、即ちソクラテスは其弟子に神の唯一なること、及び其萬物を主宰することを教へ、弟子のプラトンも之を信ずるのみならず其必要を說ひて、宗教を亡ぼさんとするは人間社會の基礎を亡ぼさんとするに同じとまで極言ました、其他ピタゴラは凡て人の守るべき義務の中最も必要なるは宗教を奉ずることにして之無んで決して正直なる能はずと曰ひ、プルタルクは神を信じ之に從ふは即ち人性に從ふものなりと曰ひ、又空中に樓閣を築くは宗教なくして國を立てるよりも容易しと曰ひ、シセロは義と善の根源は神を信ずることのみ故に宗教は國家の生命の爲めに肝要

なり、宗教なくんで國家は死すべし、如何となれで神を畏敬心なき民に忠義、愛國、一致及び法律の基礎なる義等決してあるべき筈なけれでなりと曰はれました、此故に歷史を調べたならで如何程往昔でも、如何程野蠻の國でも、神を信じない民は一ケ所もない、尤も神の性質に就ては大に誤りたることがあつたには疑ひありませぬ、神でないものを神として拜むだ事は度々ある、然しながら其神は世界を主宰るとか、人間を支配するとかいふことを信じ、又人は其神に對して義務あるといふことも信じた、全く神なしと信じたる民は開闢以來何時のとき、何處の國でも一つも厶らぬ、ソクテスが世界萬民の守る規則の中最も始めに立てられたるものは神を拜むべしといふことなりと曰れた通りで厶る、サテ斯樣に古も今も文明國も野蠻國も皆一樣に神を信ずるを見れで、之は人性の自然から出ることで、眞理に違ひない、アリストットが人の本性は眞理を覺るにあり、故に世界萬民の始終眞理とする所は如何にも眞理な

るべしと曰ふた通りでムる、又シセロが凡そ人性一般の認めたる判斷は眞理たること疑ひなしと曰ふた通りでムる、之に依て神を信ずるのは人性に從ふ行で眞理である、却て神を信せぬ無宗教者は人性に背く行で不道理ではムらんか。

第六　何故人間に無限の思想あるか

造物主の存在に就きましては、以上の證據丈で最早明にして疑を容れる所はあるまいかと思ひまするが、世には一種の理窟家なるものがムりまして、兎角何事に就ても理窟張て矢ケ間敷論じます、依て今茲に哲學上の證據を擧げて少しく論じまぜう、苟も道理心を有つて居る人で眞理を愛するの念があるならば是非とも承知しなければなりませぬ、而して此哲學上の證據は、有名なる碩學聖アンセルム、ライブニッツ、及デスカルト、の三氏が論じたもので、其論法に二樣あります、孰れも明瞭に且つ正確でムりまするけれども、未だ哲學(形而上學)の研究をしたことの無い者には、第一の論法は少しく了解かぬるやも知れぬが、第二の論法は甚だ明かであらうと思ひます

る。

第一、吾人には無限といふ思想がある、此無限といふことは言葉の上から考へれば凡ての際限を打消すことで無論消極的である、然れども吾人は斯く凡ての際限を打消したる後に潛心熟慮ても無限といふことは矢張依然として、同一に實物實際の最も大なるもの即ち絶体物として吾人の腦中に存在して居る、故に此思想は積極的である。

然して此思想は、吾人之を先天的に具へて居る、故に別段之を考へざるも、別段之を知らふと思はなくても、此思想は明かに吾人の腦の中に在る、即ち此思想は凡ての他の有限物の思想に先だつて吾儕人性に賦與られたる所のものである、假設ば無限なる思想は一枚の大なる畫圖の如きもので、凡て他の有限なる思想は其畫圖中の彼方此方に散在るやふなもので、皆な無限なる思想の中に含まれて居るのでムる、此故に無

限なる思想を先天に有たないならば、他の有限物の思想は得て起すことが出來ないといふは甚だ明かである、一例を擧ぐれば今吾人が不健全なる思想を起すのは健全といふ思想が先きにあるからである、不完全といふ思想を起すのは完全といふ思想が先きにあるからである。

此に於て當に考ふべき問題は、吾人は何に因て此無限なる思想を有つて居るかといふことである、先づ「我」自身は如何なるものなるかといふに、其肉軀其靈魂其能力皆な悉く有限物である、然らば「我」なるものゝ外部にある凡てのものは如何といふに、矢張是れまた同じく有限物斗りである、如何に廣く如何に大なるものと云ふても皆悉く際限といふ狹い文字の中に包まれて仕舞、尤も吾人は想像の奔るに任せて際限を窮りなく打消しつゝ遡ることが出來るには相違ない、けれども無限と有限とは何うしても天地の懸隔がある、サテ如斯吾人が仰で天を觀、俯して地を察するも、皆是有限物であるならば、此有限なる萬物は吾儕の腦裡に無限の思想を起さしむるの原因ではない、是に於てか無限なる思想は無限なる御者が必ず在らせられて、其御者が吾人人間に賦與られたる所と云はなければならぬ、其無限なる御者是を造物主或は天主と云ふ、故に曰く天主は存在すと。

（以上デスカルト氏所論）

第二　吾人の有てる凡ての思想は皆眞實にして虛僞はない、言葉を換れば何處にか其思想に該當するものが實際に存在するといふことである、先づ思想とは如何なるものかと云ふに、此語は希臘語にて「エイドー」と云ひ日本語に譯すれば「觀る」といふ意味である、即ち吾人の腦中に於ける事物の顯現といふことである、故に實際に存在せぬ事物を腦中に顯現こと、即ち世に全く無きものゝ思想を有つことの出來ないといふは申迄もない、難者或は時あつて人間が實際にあらざるもの、實際と合はぬことの思想を

有つことがあるから、世に虚偽の思想も全く無いとは云へぬと論ずるやも知れぬ　然れども是等は畢竟思想と判断とを取違へたのである、即ち虚偽の思想といふことでなく、判断の誤謬であるといふことを知らなければならぬ、例へば吾人が事物の眞相を知らぬときには、其事物の思想は實際に該當て居らぬ、即ち銅を見て黄金なりと思ふの類である（一）、又吾人の有つ所の或思想を毫も之に該當ない事物に結び附ける、此時實物と思想とは一致せぬ、即ち鐵の思想を銀に當嵌やうとするの類である（二）、又吾人が有つ所の種々の思想を結合せて實際に無き所の或怪物を案出す、即ち人首の思想、馬軀の思想、蛇尾の思想を同じ一つの動物の上に結合せて、鵺の如きものを想像するの類である（三）、而して是等三つの事は思想の虚偽でなく判断の誤謬であるといふことは明かである、即ち思想に虚偽はないが、思想を結合す事に就て誤つたのである、故に個々別々に調べたならば、銅の思想、黄金の思想、鐵の思想、及人馬蛇の思想等は、皆眞實にして實際に該當ないものは一つもない、果して然らば無限といふ思想も虚偽でない、即ち此思想は有限物の顯現でもなく、虚無の顯現でもなくして、此思想に該當る所の無限物が何處にか實際に存在し、其もの〻吾人脳中の顯現と曰はねばならぬ。

尚又茲に一歩を譲りて、吾人は實際にないもの〻思想を有つことが出來るとして論じても、吾人に無限なる思想が有るからは、無限なる物の存在を拒否むことは決して出來ない、如何となれば、無限といふことは絶對といふこと、即ち圓滿完了何一つ欠點ないといふことである、故に無限なる思想の中には、無論存在といふことも含むで居る、言換せば吾人に無限の思想が有るといふのは、既に其存在することをも同時に肯定して居るのである、若し實際の存在を承知せぬならば最早無限の思想と曰れぬ、されば思想の獨立即ち實際に無いもの〻思想が有るといふことが、假りに出來得ると

するも、ッハ有限物に對してのみ云ふことを得べきことで、無限物に對して曰ふのは自家撞着である。

是に於て結論す、吾人に無限の思想あるは無限物の實在するの證にして其無限物は吾人稱して造物主或は天主といふ、故に曰く天主は存在すと。

第七　造物主は如何なるものか

造物主の在らせられるといふことは、以上の證據丈けで最早れ疑ひはあるまいかと思ひまするが、眞の道を知るには唯神樣のあることを知た斗りでは尚不足で厶ります、其上に神の性質即ち神樣は如何なるものなるやといふ事を知るのが最も必要で厶る、昔より多くの國々が、神の性質に就ては頓だ間違た考へを致しました、或國には神は有形物と思ひ、或國には人間に似たるものと信じ、又甚しきは物の種類を誤つて禽獸までも神と信じて拜むだ國もある、今を去る凡二千年前、歐羅巴中最も開化なる國、

西洋各國を攻め取る程の勢力あつた國、即ち羅馬に於ては、人間の私慾を神とし畏れ敬ふて拜みました、即ち傲慢の神をジュピテールといひ、邪淫の神をヴェニュスといひ、飲酒の神をバックスといひ、偷盜の神をメルキュルといひまして、是等は各厚く信仰された神々で厶る、又埃及といふて、昔になか〳〵開けた國があるが、其民は世界の建築物の中最も珍らしいものを建てました、其建築物はピラミッドと云ふて、今にも沙漠の中に遺つて居る高い塔で厶ります、此十九世紀に當て、蒸氣などの良い機械を發明したと云ふても、彼の樣な塔は建てられぬと工學者が感心致します位で厶る、試みに其塔一基を毀して、高サ一間巾三尺の石垣としたならば、日本國を其石垣で取圍ことが出來ます、如斯感心なる建築をするほど開けた所の民が拜むだ神は、何んなものであるかといふに、牛及イビス云ふて鶴に似た鳥でありました、殊にイビスは最も尊い神で、設ひ過失でも此鳥を殺したものは直ぐに斷罪に處するといふ法律

までありました、其他印度といふ佛教の起つた國でも、牛を佛とは致しませんが、人間よりも貴いものと致し、牛の糞までも極めて難有と信じ、毎朝佛を拜む前に先づ其臭き糞を以て額を塗ります、ソウして外へ出るときも之を洗はず其儘歩るく、私は前後三回印度に行きましたが、其度毎に斯樣に顏が牛の糞だらけの印度人に何人にも出遇いました、又シャムといふ國では白象を神として拜みまする、日本國に於ても矢張同じ樣ではありませんか、獸を貴むだことはありませんか、狐を稻荷と崇めたことはありませんか、之は、私よりも諸君が能く御存でムりませう、又日本國に於ては、人と神の差別がなく、人間が死すれば神や佛に成ると信じた人も多くあります、日本國人が神の性質に付て斯樣に間違た信仰を持ちましても耻ケ敷ことではありませぬ、右に述ぶる如く日本よりもズット開化した國々ですらも、彼のやうに間違た考へを致した、眞の神は如何なるかといふ其本性を忘れたならば、神に就て種々の愚說を立てるは當然でムる、不知不識出來たのでムる、死人を神佛として拜むといふは、敬と拜の差別を忘れたから生じた間違で、即ち敬とはウヤマとといふ事、人が人に對して當然爲すべき禮義でムる、拜とは、オガム とふ事神のみに對して爲すべき務でムる、故に父母長上君主或は古への明王若くは先哲などに對して、敬ひをするは素より良いことであるが拜むではならぬ、然るに日本人は之を取違へて、先祖の恩誼を考へて之を敬ふといふことから、遂に過ぎて拜むといふやうになりましたのでムる、サテ如斯神に付いて何か一つ誤謬が生じたならば際限なく種々樣々の誤謬が起つてまいります、故に諸君の如く御一体なる造物主を未だ信仰せざる人々の爲めには、眞の神の性質を知ることは最も肝要なことでムる。

先づ神とは如何なるものであるかと云ふに、吾儕人間のやうな卑しく劣りたるものが、神のやうな貴く優れたものゝ性質を明かに知られる筈はない、又吾儕は己れの

性質すらも明かに知ることと出來ないに、況して神の性質を明かに知ることが何うして出來ませうか、殊に神は最も勝ぐれたる、最も意味深き御者にして、如何なる辯者、如何なる學者といふても、之を說明すためには今日使用だけの言辭では甚だ不足で困るで厶りませう、然しながら其幾分かを說明すことは出來ないことではありません、哲學を以て見ると、神とは一言にして絕對或は無遍といふ、何故絕對或は無遍なるやといふに、神は在りとあらゆる萬物の本原だからで厶る、萬物の本原は何故又無遍でなければならぬかといふに、萬物の本原は是非とも原因なき原因でなければならぬ、即ち始めなく造られざるもの、自らの力で生きるものでなければならぬからである、如斯始めなくして自然に在らせられたといふは、絕對或は無遍といふに同じである ッゥして無遍ならば無差別なるに依て、或る一點が無遍ならば全体も矢張無遍でなければならぬ、故に萬物の本原なるものは始めといふ一點に付て無遍であるから、其他

の所即ち終りも智恵も能力も善德も皆な悉く無遍にして限りがないと云はなければならぬ、之に依て眞の神なる造物主は全智全能全善である、是は造物主の性質を哲學上から解釋したので、餘り意味深く分り兼るやも知らぬが、然し此他にも多少造物主の性質を知り得べき道がある、即ち造物主と被造物とを比較て考へるので厶る、凡そ吾儕の眼に觸れる萬物は悉く有形であるが、神は全然之に反し無形で厶る、無形ですから縱横高低もなく、色も香もなく上下左右の差別もない、人が眼を以て視、手を以て觸はることも出來ませぬ、ッー云ふたならば神は力も働きも無いとれ考へかも知れぬが、決してッーでないといふことは、人間の靈魂が無形じやけれども中々力のあるを以ても知られる、無形で眼に視へぬから力がないとは云へぬ、若無形でないならば神ではない、何故といふに人の身體は靈魂よりも劣る如く、凡て有形物は無形物よりも劣るもので厶る、神が有形ならば何うしても限りあるものである、此故に有形

とは神の性質に反することである、又萬物は變り易いもので、即ち始めありて成長し後には老衰し、遂には其力其働全くなくなる、天文學に依れば、月は今死んだ球といふ、其は何ういふ譯じやといふに、彼の月も始めは今の太陽の如く火の球であつたが、漸々冷へ固まつて遂に其力を失ひ、最早今日では熱も空氣も水も生活物も何も無いに依て、全く枯れ果たる球でムる、是れ死んだ球と名づくる所以でムる、吾儕の載て居る此地球も矢張其如く、余程老つた球になりました、其證據は澤山あります、只今堀出す所の石炭といふものは、往昔の草木が炭に化したので、此等の草木は何萬年前には五六十間も高い樹、或は草であつたのです、又今日石岩などの上に生へる小さな苔といふ草も、昔には十二三間も丈けが延びたのです、之に依て草木は昔よりも余程衰へて來たといふことは甚だ明でムる、禽獸人間に至るまで皆な其通りであることは、往昔を調べずとも僅か二三百年前からのことに付て考へても分る、二三百年

前に我佛國の華士族が用ひたる具足は、今の人には着ることが出來ない、又其具足を舉げるに一人の力では六ケ敷、力斗りでなく身の丈も其通り、漸々低くなります、故に西洋諸國に於て徴兵に合格すべき身長の寸尺が追々變つてまゐりまする、日本に於ても同じやうな事があるは、諸君の御實驗なさる所でありませう、地球上にあるものは總て皆其通り、漸々衰弱て來る、之に依て見ると此地球も月の如く終りに向て進むで居るので、何時か枯れ果てゝ死んだ球になるときがあるのでムる、眞の神なる造物主は之に反して、始まることもなく、成長することもなく、老衰することも、無くなる、終るともいふこともありませぬ、斯樣な御者は實に貴いものではありませぬか、神道や佛敎で敎へる如く人間の如き卑いものが神や佛に成るといふ說は、神の性質を辨へざる人の說で、學問や道理を知らないもの、想像から出た取るに足らぬ話と云はなければならぬ、以上申述ぶるが如く、造物主は萬物の本原にして無遍絶對ならむ、必

す御一體でなけれゞならぬ、若し神が二つ以上あれゞ必ず差別がある、差別があるのは何方にか無い所があるので、即ち缺點である、缺點があれゞ無遍絶体でない、故に眞の神でない、尙ほ分り易く例へれゞ、一といふは數の本原である、即ち萬は千より來り千は百より來り百は十より來り十は一より來つたので、最早一の前に數はない、一が數の始めにして百千萬の本原である、造物主も如斯萬物の本原なるが故に二つ以上ある筈がない、一戸を齊へる主、一國を治むる王が一人なるが如く、造物主は御一体であるといふことは甚だ明かでムる、此御一体なる造物主が眞の神樣で、前にも申す如く、漢語に天主或は上帝天帝など申すのでムる、造物主の話を始めて聽く諸君は、或は他國の神のやうに思ひなさるかも知らぬが、昔より造物主を知らない國は一國もない、支那の孔子も罪を天に獲れゞ禱る所なしと、子思も天命之を性といふと曰ふた、此天といふのは即ち天主のことで、萬物が此天に造られたといふことを信じたことが明かである、又日本國に於ても、人の死するを天命といひ、作の善惡を天性といひ、惡人の不幸を指て天罰といふ、此天命天罰などの、天といふのは、即ち天主のことで、矢張生れながら造物主を知て居るといふ證據でムる、故に世界萬民の拜まなければゞならぬ眞の神樣は造物主或は天主といふ御一体なる御者である、故に天主教は一國の道ではない、世界萬物をれ造りなされた造物主の道であるから世界萬民の奉ずべき眞の道でムりまする。

第八　造物主の全智全能なること

造物主の御一体にして無遍じやといふことは以上申上た通り甚だ明かでムる、ッウして無遍なれゞ其能力は全能にして能はざる所なく、其智惠は全智にして知らざる所なく、其善德は全善にして微少も不義不德がないと云ふことも理論上明かでムる、否な理論上斗りでなく實際にッウである、支那の程伊川といふ先生が百物を見て化工

の神を知ると曰ふた通り、此天地萬物を研究するに從て益造物主の全智全能に驚きます、彼の世界を照す太陽といふものは、火で燃へる球にして、其大さ凡そ地球の百五十萬倍である、ソコデ天文學上疑ひないことは、是程大なる太陽も毎夜煌々見ゆる無數の星の中の一つで、其中にも最も小さいものである、然らば其太陽より大なる星は其數何の位あるかといふに、肉眼を以て見れば凡六千見ゆる、又た望遠鏡を以て見れば十五萬見ゆる、又天文鏡といふ天体を窺ふ所の長さ三四間もある鏡を以て見ますると一億見ゆる、然るに近年に至ては星を見る爲に極く良い工夫を考へた、即ち天文鏡を以て蒼空を寫眞に取るのです、此寫眞を顯微鏡を以て調べると、見ゆる星は二億五千萬だといふ、實に驚くべきことではありませぬか、之に依て見ると機械、が完全なるに從て星の見ゆる數が從て殖へて來て際限がないと思はるゝ程でムる、シテ見ると未だ人間に見へない星が何百億あるかも知れぬ、此澤山の星々は先きに云ふた如く皆な太陽と同じ火で燃へて居る大なる球である、ソウして又星の距離は何の位であるかと之を計算して見るに、餘りに遠すぎて其數の名前がなくて迚も云ひ顯はせぬ、依て斯いふ遠い距離を測るには光の速力を以て致します、太陽から地球までの距離は凡そ三千八百萬里ある、是を試みに一時間に十二里半ヅゝ進む汽車に乗て行くとすれば三百四十年かゝる、若し人間が徒歩で行くとすれば晝夜兼行て一千年餘かゝらなければ太陽まで就くことが出來ない、是程遠い距離を光線は何の位に來るかといふに、光線の速力は一秒に凡そ七萬七千里斗り進むから太陽から地球まで八分餘でムります、斯程に早い光線が一番近い星から此地球まで少くも三年半かゝる、故に極く遠い星なれば二三千年もかゝらなければ此地球まで届かぬ、ソウして見ると此地球に於て今日始めて見ゆる星なれば、其星は十九世紀中に出來たのではなく、今を去る二三千年の昔に出來て漸く其光線が今日に至て此地球まで届いたのでムる、是は實

に驚いたことではありませぬか、斯樣に想像も及ぶぬ程な遠い廣い所に萬物をれ造りなさつた造物主は實に全能では厶らんか、又た斯樣に學問が進んで、造物主の貴さ所感服すべき所を益發見す時勢に當ては、佛教神道などの神佛の說は誠に取るにも足らぬ愚說では厶らんか、次ぎに造物主の御智識は如何でせうか、是も亦た此世界にある所の人造物と天造物とを比べて見れば其全智なることは甚だ明かで厶る、時計といふものは西洋紀元千三百七十年に當り、佛國パリスに於て獨逸人ドヴィクといふ人が始めて精密に仕上たもので、色々の車齒輪を搆造て出來て居り、スルメ鋼を卷けば其彈力の爲めに大小の車が運轉して時刻を報せる、其細工の巧なることはなか〳〵感心する程で厶る、なれども之を天造物に比べて見たならば其違ひは實に天と地ほどで厶る、先づ人間自身の五体の搆造や働きを生理學解剖學を以て調べて御覽なさい、指一本でも其搆造其働き驚くほどで厶る、其他手足から耳眼口は勿論內臟の工合まで調べたならば、其搆造の細密なる其機働の巧妙なる迚も彼の時計などの如き人造物と較べも及ぶぬ違ひで、如何に名人なる細工人といふても毛筋一本作ることは出來ませぬ、造物主の全智全能なる御作は之を調ぶれば調ぶるほど益感心の外厶らぬ、私が弱冠の時一日佛國パリに開かれたる博覽會を見物致した、其中に生人形を陳列した所を看るに、學校に於て教師が生徒に教授する所ろの樣子がなか〳〵好く出來て居りますから、其前に進んで參りまするとと、或老人が杖を突て矢張之を見物して居りました、私は其老人の前を通り過ぎんとして會釋して御免なさいと言葉を掛けると、案內者が大に私を笑ひました、私は何故笑ふかと訊つて案內者に尋ねまするとと、案內者が對へて其老人も矢張生人形であるといひました、私は驚いて熟々看まするに成程生人形に相違ない、斯迄人目を欺く程巧みに出來た生人形は實に名人の作で厶ります、然しながら此世には是よりも何十百倍勝れたる眞の人間が造られてある、人々は

生人形ですら其細工人の名を聽き之を讃め敬ひまするに、何うして萬物の長たる人間をれ造りなされた全智全能に在ます造物主に對して之を讃め敬ふの心がありますまいか、其他日月星辰より禽獸蟲魚に至るまで、皆な造物主の御德を顯はさないものは一もない、吾儕の毎日仰ぐ朝は東より出で夕は西に入る彼の太陽が、地球を離るゝことは前に述る如く凡そ三千八百萬里であるが、是は此地球をして熱からず寒からず丁度温和ならしむるに適當の距離である、若し是よりも近けれど太陽の熱は甚しくて生活物が生息に適せぬ、モット遠けれど寒氣が甚しくて草木の成長までも出來ない、其れに何うして太陽は斯く丁度よい距離に在るであらうか、全智なる造物主でなければどツンナ計算は迚も叶はぬ、如斯すべての物が悉く良い工合に造られ、都合よく置かれてあるのは、造物主の全智全能を顯はして餘りあると云ふべきである、聖ポーロと云ふ高名なる學者が、智慧を具へたる人間は天地萬物を看て造物主のあることを知る而已ならず又其限りなき能力及び貴むべき所以を明かに知るべし、故に造物主を知て之を拜せざるに於ては決して言譯なき人なり、と曰ふた通りで造物主と人間の關係を構はないものは何うしても心の安全を得ることは出來ませぬ。

第九　造物主の全善なること

造物主の全善とは如何なることなるやといふに、眞の神なる造物主は完全なる善德を具へ給ふといふことである、詳言せば不義不道理など少しも無く其諸の善諸の德凡て限りなく具はり給ふといふ意味である、何故又物造主は斯く全善に在ますかといふに、造物主の性質上是非ともソウで無れどならぬからである、前にも云ふ如く造物主は無遍である、無遍ならば決して缺點がない、缺點がなければ何うでも其具へ給ふ御德は悉く完全であると云はなければならない、此結論は眞理にして疑ひありませぬ、然し乍ら此全善なる御德は世界萬物を視て全能全智の御德を知るが如く明かに

分らない、故に智惠淺くして考へ乏しき人は現世の狀態を視て神の全善なることを疑ふて種々に難問を試みるものであります、一例を擧げて申せど、若し造物主が全善に在さど何故人間に病難苦死を與へるか、或は何故人に貧富の別を立て、甲は金滿家となし乙は貧究者とするか、是を以て見ると造物主は全善でなく却て殘酷の心を持ち、愛憎の念あるものと云はなければならぬと、成程一寸御尤の樣じやが、然し道理を以て考へたならば決してソウでないといふことが分る、世に貧究して難澁するは、放蕩の結果か博奕に耽つた成れの果で、多くは自ら招いたのである、されば是を以て直ちに造物主の全善を非議わけはない、且又一歩を進めて考ふれば、世界は凡て有形物であるから、有形故に限がある、限あるものなれば何うでも缺點がなければならぬ、例へて申せば世に毒藥がある其毒は人の生命を害ふといふ缺點がある、故に其毒藥の爲には幾多の人を殺した、期樣な毒藥を造り給ふた神は人間を害するものじやといふたならば

如何でせう、道理の分つた人ならばソンナ愚說は取るに足らぬとして齒牙に掛けない で仏りませう、何故なれば疾病を治癒に効能の多い藥はど毒藥である、若し世に毒藥がなければ多くの疾病は殆んど治癒ことが出來ないと云ふてもよい位だからで仏る、されば毒藥をば造りなされたのは却て造物主の難有思召といはなければならない、假しや其毒藥の爲に死んだものが有るとしても、其は使用方を誤つたからで自ら招いた禍自業自得と申すものじや、又現世には暴風が吹いて家屋を倒し、大濤が起つて船を覆へし、爲に多くの人々を害することが時々ある、然しながら暴風が吹いて來なければ空氣は何時も同じ場所に滯つて居るゆゑ、次第に腐敗して終に呼吸に適せぬのみならず諸種の傳染病の黴菌が非常に殖へて、是が爲に人蓄に酷ひ害を懸ける、けれども幸ひに暴風大雨が空氣の清潔法となつて、是等の害を未然に防ぐ、概ね皆な斯の如く、世界の恐しき現象も、害あれば亦た益もある、一得一失といふは有形物に免が

れざる通弊でムる、然るを害のみを擧げて論ずる人は、皆な眼の着け所が偏つて居るので、物事の一瑞を擧げて全体を評する盲論でムる、貧富貴賤の差別がある も矢張同じで、現世に是非なくて叶はぬことじや、若し世人が殘らず位高く財産家になるならば、誰れが額に汗して田地を耕しませうか、百姓は忽ち其骨折業を停めて逸足早く田舍を逃げ出し、田地は爲めに荒れ果て米麥は穫られず即坐に饑饉が來るでムらう、又た誰れが熱さ寒さの厭なく獵し漁るものあらう、貧乏人がなければ土用中に鍛冶屋をしたり寒中に洗濯屋をするものはないといふ道理じや、偖斯樣に考へて見れば、世が隆になる爲には貴賤の差貧富の別もなければならぬことでムる、若し民に貧富貴賤の別がなければ忽ち其國は衰微する、故に造物主は國が衰微して亡びぬ爲に貴賤貧富の差別を以て瞑々の裡に御守護なさると云ふべきでムる、尙此上人間が難義を受ける譯を詳かに知るは、道理斗りで到底出來ぬ、之を明かに悟りたいならば人間に原罪があるといふ事を知らなければならぬ、（本書第二篇原罪の章を見よ）造物主の全善に就て尙ほ一つの人性に關係したる難問がある、是は無宗教者より屢聽く所でムる、即ち造物主が全善ならば何故人間が罪を犯さぬやう惡を爲さぬやうに造らないか、惡を爲すと知りつゝ人間を造りしとは如何にも不都合な話じやないかと云ふのです、成程物の性質も知らない人は左樣な考を起しさうな事じや、なれども惡を爲さぬ人間を造るといふことは自由なき人間を造るといふに同じである、人間の如き有限なるものゝ爲には自由と善惡を撰むの能力と云はなければならぬ、善或は惡を己が欲する儘に爲すことが出來るといふ能力がなければ自由の權が無いと同じである、人性には智慧と自由の二つの德が具て居るから他の動物よりも貴い、若し二つの中其一を缺いたならば人間でない、又人間にして自由が無いならば只極つた道に束縛て從ふのであるから其働きは器械的で、彼の時計蒸滊船などが受けた力を以て定つた働きをするのと少しも撰む

所がない、禽獸が矢張其通りで、彼等にも自由の能力がない、故に各具つたる性即ち稟賦能力に相應なる働きの外何にも出來ない、犬は犬馬は馬各其性の奴隷となつて、眞の考へもなく眞の自由もなくして働くのでムる、手近く申さゞ禽獸は完全な器械のやうなものです、如何程完全でも器械じやから之を賞罰する爲めに裁判所を建てやうと思ふほどの狂妄者はムらん、人は萬物の長と云ふのは此自由といふ貴い德があるからである、自由の權利があるから無遍なる造物主の御目から視ても人間は貴いのでムる、又人間には自由の權があつて、善を行ふも惡を爲すも己が心の儘出來る、即ち貴き働き賤しき働きは各自の自由であるから禽獸と違つて其行爲に責任がある、是不滅なる靈魂を神より賦與られた所以でムります、（本書第二篇靈魂の章を見よ）偖斯く論じ來れゞ、右の如き難問をする人は人性の如何なるものかといふこと、及び人間の他動物に優れて高尚なる所以を知らずして云ふのである、換言れゞ人間に生れたのは殘念じや、禽獸に生れたならゞ幸福だらうと云ふに同じでムる、ソンナ理屈張た疑ひを起すよりも、智慧自由の如き高尚なる能力を與へ給ふ造物主の難有鴻恩を考へて、全善なる造物主の御心に適ふやうに、一生涯行を正しくして心を眞直にして、善行を積むやうに力を盡すがよいではムらんか。

第十　造物主の攝理

毎々申上る通り、萬物の原因なる天主、即造物主は御一体に在して二つあること出來ぬといふは明かでムります、造物主を除く外萬物は人間を始め日月星に至るまで總て皆な始めあるもので被造物であります、シテ見ますると吾人の拜まねゞならぬ眞の神は御一体なる造物主のみである、然るに世には御一体なる造物主の存在を信ずるも、造物主が吾人々類に下し給ふ所の御惠の深いといふことに付ては大に疑ひを懷くものが深山ある、左樣な人は常に云ふ、造物主は人間をれ造りなされたに疑ひない、雖然

人間は神に比ぶれば其劣ること如何程なるか分らぬ、故に無遍なる造物主が人間の如き小さく卑しきものに對して御心配なさる譯はない、造物主は萬物を造つた後は是等卑しいものは構はずして捨て置くに相違ないと、斯やうな考へを持つて居るから造物主の深き恩を辨へず、又之に奉事ことも無用じやとするのである、是は前に世界萬物の秩序あることを陳べました所を讀みなされたならば、其誤りなることはれ分りになるでありませうが、人々の多く疑ふ所でありますから、更に委しくれ話しいたしませう、先づ世の有樣を熟々れ考へなさつたならば、造物主は世界萬物を構はずして捨て置くなどいふことは決してない、却て日々吾人にれ與へ下さる御惠の厚く深きことは量ることが出來ないほどで、迚も母が子を愛する深き惠みも遠く及ばぬといふは明らかに知られまする、母が子を育てるには、先づ之を養ひ之に難儀不自由をさせないやうに心配いたします、造物主が世界を見ることは母の子に於けるよりも尙御心配なされ、世界の混雜せぬやう人間に難儀ないやう御守護なされて居るのであります、御覽なさい現世に於ては人間を除く外智慧のあるものは一つもない、人間は斯く萬物に超へて智慧あるものといふても、若し優れた人があつて法律といふものを立てなかつたならば、國を治めることが出來ない、社會を結んで往くことが出來ませぬ、又啻に法律を立てた斗りでは未だ足らない人々が之に背かぬ爲に、警察とか裁判とかいふものを立て、取締るところの法律の守護者即ち王がなければならぬ、サテ智慧を具へた人間でさへも斯く守護する國王がなければ、其法律に遵はぬ、然らば智慧なき蓄類などに於ては始終守護なさる神がなければ、何うして其性に關する規則に遵ふことが出來ませうか、御存の通り、動物の規則といふものは禽獸其類に由て各違ふ、今鳥が巣を營むを見るに燕は泥を以て巣を造り雀は草を以て造る、又烏鷹の如きは木の枝を以て造る、是は昔より今に至るまで全く同じ規則に從つて同じ造り方である、又巣の

大少は其卵を孵す多少に依て違ひ、其子の爲に都合よく巧みに造り、開闢以來巣の造方を間違ふたものは一つもない、之を以て視ると智慧なき鳥獸は智慧ある人間よりも定まつた規則を能く守つて居る、智慧なき彼等が何うして種類に由て異りたる規則を背かぬやといふに、丁度母親が稚兒の手を引いて躓かぬやう心配するが如く、造物主が始終禽獸を導いて心配なさるからでムる、さもなければ世界が混雜にならぬ譯は少しも分りませぬ、尙諸君がれ疑ひならば、獸類の孳殖に就てれ考へなさい彼猫狗兎の如き壽命の短きものは、一度に五六匹の子を產み、牛馬の如き長命のものは、一度に僅か一匹である、是短命の獸類が子を產むこと少けれど、其種類は忽ち絕へるからでムる、總て短命なるほど子を產む度數多く、又一度に數多く孕むといふやうに出來て居るのは、實に感服すべき造物主の攝理ではムらんか、又た人類の絕へることない爲めに、其子を產むこと殆んど男女同數ならしひるのは各國の統計に依て明かである、是人類が限りなく世界に繼續するやう造物主が攝理なさるであるといふことは明かではムらんか、總ての禽獸虫魚皆な是に同じである、之を以て考へて見ますると、世界萬物は皆悉く人間を助けんが爲に造り、又混雜せぬやう始めより極つた規則を以て支配なされて居るに相違ない、故に若しも世界に人間がないならば、從つて禽獸虫魚も生ずる譯はなく、又此感心な規則を立てゝ支配なされる譯もムりませぬ、之に由て造物主が世界萬物を造つた後は之を捨はずに捨て置くといふやうな說は、人間の御父なる造物主の下し賜はるゝ深き御惠を輕んずる說で、恩知らずと申さんけれどならぬ、諸君よ吾人が日夜天より受ける所の恩は如何斗りでありませうか、吾人が世に露命を繼いで居るのは全く天恩に依るのでムる、吾人が稚きとき母の乳戾に繼つて飢を凌ぎ、長じては穀類肉類を以て身體を養ひ、家財道具を作るには金石草木あり、薪炭ありて火を焚き、綿布毛布ありて、寒を凌ぐ、而して是等人間に必要の品が一として缺けること

となさは、是皆悉々天より下す恩ではありませんか、造物主の愛は其攝理に明かに現はれて居るではありませぬか、如斯日々受る所の限りなき鴻恩の萬分一をも、多くの人々は考へず思ひ出さずして居る、さりながら能くれ考へなさい、今諸君が無病息災であるが、若し不幸にして大病に罹り、如何に心配しても益危く、最早手を拱して死を待つの外なきの時に當りて名醫あつて其病を癒して呉たならば、如何眞に其歸死回生の恩を難有思ふでムりませう、然しながら諸君よ、病を癒した醫師の恩よりも、無病息災ならしむる樣始終れ守り下さるれ方があるならば、尙難有ことではムらんか、其れ方が即ち人間の父なる、造物主である然るに天主教を信仰せぬものは、現世の難儀苦勞を見て、造物主は幸福も與へるが亦た禍災をも與へるのだといふて、其恩の高大なることを少しも難有思はぬ、成程現世には不幸なものが多く難儀斗りのやうである、けれども難儀不幸は皆な人が自ら招くのであるといふことは、前きに造物主の

全善なることを說くところに論じましたが、見やうが違ひまするから重ねて陳べます先づ難儀には二種あつて、一は智慧の誤より出で、一は情の誤より出るのです、例へば火といふものは人間に一日も缺くべからざる必要のもので之無くんば吾人一日も生活することが出來ない、然れども誤つて火傷をし家を焚くこともありませう、馬は人を乘せて走り其便利なることは御存の所だ、けれども誤つて落ちれば、命を失ふこともある、手斧は大工の爲に便利である、けれども誤つては足を截る總て皆な益われた害もある、然れども思はなければならぬ、其害の多くは吾々の誤より出るもので畢竟自ら招くのであるといふことを、次は情の誤より出るもの、即ち情が捩れた爲に罪を犯し、其爲に受くるの難儀、是は第二篇の原罪を論ずる章に於て委しく論じまするから、暫らく省いて、只哲學者ド、メストール氏の知言を聖彼得堡の夕話と題する著書中より引いて、此論の局を結びませう、曰く眞理と世界の狀態及び各國の歷史等を研究せ

るものゝ爲に定理原則とすべき程明かなる規則一あり、即ち凡ての艱難苦辛は天罰にして其原因を究むれど、如何しても人間の犯したる罪に歸せねどならぬ、是は一個人の受るも國民の受るも皆な然り、而して其原因に二つある、即ち已れ自ら犯すの罪、及び其祖先の犯したる罪是なり、されど艱難は造物主より出るに非ずして其義より出るものなり、故に世に艱難あるを見て造物主を疑ふは、恰も造物主は眞義を知らずといふに同じ、斯る批難をなすものは眞理を解せざものなりと、實に其言の通りでムる、諸君よ何うか第二篇に論ずる所の原罪及其傳來といふことを見て、ド、メストール氏の此言の僞りならざることを知り、萬善の源なる造物主は種々の深き恩を人間に下し、吾人は依て以て不自由なく世に生活せらるゝやう攝理し給ふと信じ、其恩の山よりも高く海よりも深きことを考へ、一生涯其恩を謝し、其命を守り、責めては其恩の萬分一を報ひんと冀ふのは、眞理にして人間の義務なることを御承知なさい。

第十一　造物主と人間の關係

是迄申上げたる所を簡約て云へど、世には萬物を造りなされた造物主が必ず在ちぜられる、其造物主は萬物の本源、森羅萬象の原因であるから、無遍なる御者である、無遍だから無形にして御一體に在まし、始もなく終りもなく全智全能全善の德を具へ給ふ御者だといふのでムる、又造物主は世界萬物とは全く別にして、自ら在らせられる一つの御者だといふことを知らなければならぬ、例へて申せど一個の人は他の人類とは別にして活ける一つのものなるが如くである、故に天主敎の經典舊新兩約聖書に造物主を稱して活ける神と度々記してあります、多くの人々が思ふやうに眠つて居るものではない、盲者聾者の如きものではない、世界萬物に對して何の心配もしないやうなものではない、ソンナ大な間違た考をする人は後には飛だ目に遇はねどならぬ、無遍なる造物主は活ける一つの御者にして世界萬物を主宰し人の行を視人の言を聞き人

の心の中までも知て居られる、故に其無遍なる義を以て人の思言行に於て爲したる善惡に全く權衡たる賞罰を與へねばならぬといふは眞理でムります、〔委しくは本書第二篇にあり〕造物主は活ける一つの御者であるといふことを考へないから之を恐れなひ無宗教者が多い、若し造物主は活ける神だといふ事を深く考へたならば、何うしても之に對して必配せねばならぬ、造物主か萬物をれ造りなされたのは止むことを得ず造つたといふ譯ではない、無遍なる造物主は無限の自由權を具へ給ふ、故に萬物を造ると造らざるとは其權内にあります、人間が造られたのは造物主の自由權に依て與へられたる恩でムる、人が生れて現世に來ること、死して現世を去ることは皆な造物主のれ定めなさつたところで、生死共に偶然なることは決してありませぬ、されば何う考へても人は造物主に對して全く獨立なること、毫も關係を持たぬといふことは出來ないことでムる、即ち造物主は人間の本であるから本末の關係がある、人間の眞の主であるから主從の關係がある、人間の眞の親であるから親子の關係がある、尙又哲學上より研究したならば是等の關係よりも一層重い關係がある、即ち造物主は無遍であるから自らの力を以て自然に在せられる、故に其存在は絶對である、天地萬物は本虛無より造り出されたので、始めもあり限りもあり故に其存在は待對である、之に依て萬物の存在する狀態は之を虛無と極めねばならぬ、自已の力を以て存在するでなく他の力に依て存在するものは、其働きも自已の力ではない、其活きて居るも自已の力ではない、如斯虛無の狀態なる萬物は、其存在する爲に、其活きて居る爲に、絶へず造物主の御力を受けねばならぬ、若し暫時の間も其御力を受けなかつたならば、たちどころに消滅してしまはなければなりませぬ、假設ば今私の手に依て支へられたる石が、其手を引たならば直ぐに地に落つるが如く、世界萬物が造物主の御力と離れたならば即坐に消滅することは、恰も影の形に添ふが如くでムりませう、而して其消滅するとは運轉が止

まる、働きがなくなるといふやうなことではない、之を人間にして云へば、死ぬるといふことのみらず其肉軀も其靈魂も全く消へて仕舞ふのでムる、簡短に云へば虚無より萬物を引出したる力が止まるならば、復び虚無に歸らなければならぬといふ道理である、此故に哲學には物の存在するは絶へず造物主に造らるゝに同じと云ふのである

人間が現世に生れて活きて居るのは絶へず造物主の御心配を蒙むつて居るからじや、如斯深き御恩ある造物主に對しては、其關係の重い事は比べるものがない、此故に設ひ無神論者でも、何にか考へるとき、何にか研究するときは、嫌でも應でも造物主に當らなければならぬ、夫れ眞理とは何か、造物主の全智より出る所の理である、人の想像から出るものでない、道の本原天より出づとは昔の支那人も云ふた、其故にこそ眞理は時に由て變り處に因て異なるものでない、萬國萬代一定不變の法則とは何か、造物主の義より出る所の善惡の差別である、故に法則は造物主のれ定めなさつた性法に適ふに從て益完全になるのでムります、其他天文學理化學動植物學地質學などの諸學問は何か、是又造物主の造り給ふた有形物の力働を研究するといふことである、故に學問上種々の發明があると云ふも、其は眞の發明ではない、只造物主の立てられた規則の幾分を覺るといふ丈に過ぎない、如斯世界萬物凡て造物主に關係せぬものは一つもない、古語に諸法は神より出づとある通りでムる、然しながら吾儕人間は自由の權を具へて居りますから、關係は嚴肅と極つて之を絶つことが出來ないと云ふても、人間の方から、其關係を保ち、或は捨てることが出來る、例へば不孝なる子は親子の關係を捨てたのでムる、然し親の方から云へば關係の有樣が變るのみで決して切れない、即ち孝行の子なれば親の方からは愛といふ關係じや、けれども不孝の子なれば怒りといふ關係に變つたといふ違ひ斗りで、其關係は始終繋がれて居る、是に同じく人間も神に對しては忠義と孝行の關係がある、なれども人間は之を捨てること、

が出來る、然し神は無上の主人であるから人間に對して無上の支配權がある、其支配權を脱れることが出來ないことは恰も人民が政府の定めたる法律に背くことは出來るも、其制裁即所刑を脱るゝことが出來ないと同じである、否な人民が法律に背いても工夫を以て或其所刑を逃るゝものは折節ありまする、けれども造物主は無遍にして全能に在すから如何に工夫を凝らしても、其無上の支配權を免るゝことは人間の力に及びませぬ、何うでも神の支配の下に行て、其相當の罰を受けねばなりませぬ、是れ宗教の必要なる所以で、是非又人間は眞の宗教を求めて此關係を正當に保たなければならぬといふ次第でムります。

附言　神に就て諸種の謬說

古來世界萬國に行はれました所の神に就ての諸種の謬誤は其數澤山ありますが、要するに左の五つに過ぎませぬ、依て茲に一言其非を辨じて以て結論に換へませう。

第一は、無神論です、即ち世に神ありて世界萬物を創造之を主宰する等のことは妄想であるといふ說でムる、此說は別に論ずるまでもなく、前に述べたる有神論を看ば、其非なることは明かでムります。

第二は物質論或は唯物說といふ、即ち有形なる世界萬物は神の力に依て造られたるものでなく、自然に存在し始めも終もないといふ說でムる、此說に從へば有形物は無遍なるものと云はなければならぬ、始めもなく終りもなければ時間に付て無遍である、無遍とは無差別なるが故に、時間といふ一點に付て無遍ならば其他全体も無遍ならねばならぬ、即ち其容積其力量共に限りないものでなければならぬ、又之に變化破壞、缺點など決してある筈がない、然れども有形なる萬物は如何に大きくても實際に限りがないと云はれぬ、其他變化も破壞も缺點も皆なある（前章造物主の性質を論ずる所に明かなり）されば物質論は凡そ物質は無遍なるを得ずといふ哲學の定論に背くこと明かでムる（一）、哲學者が

ヤウェが凡そ自ら動くこと能はざるものが如何にして自ら存在することを得るやと曰ひし如く、自己の力を以て動くこと出來ない物質が、（惰性を論ずる章を看よ）如何樣にして自ら存在することが出來ませうか（二）、物質の性は死物である、故に化合力、引力ありと雖も生命なし、此生命なき物質が如何樣にして生命あるに至りしか、物質の有て居る化合力とは原子の相集り或は相離るゝ力である、引力とは物の相引く力である、されど生命は化合力引力より出るの現象とは云へない、世に生命あるは必ず他に其原由がなければならぬ、物質論者又曰ふ、物質には化合力引力の外ないに相違なし、然れども其化合力引力の働きに因て物質が樣々の形狀に組織した其結果生命を生じたであると、今假りに物質論者の云ふ如く、有機体組織を物質に固有化合力引力が然らしむるとしても、さふ形狀の變化にして性質の變化ではない、されど物質に以前有たない力、即ち生命の生ずる所以はない、況して無機體なる物質が、其固有る力のみで自ら有機體の組織をなしたる實例一もなきに於てをや（三）、有形物固有の力は無形なる働きを爲すことは出來ないといふは眞理である、然るに人類の如く高等なる活物は、嘗て物質に有たない所の無形の働きを爲す、例へば思想、判斷、愛憎、嫉妬、傲慢などの如し、されど是等の働きは何より來るか、之に依て世界萬物は物質斗りでない、物質の外是非無形なるものがなければならぬといふは眞理である（四）。

第三は多神教です、是は神が二つ以上あると信ずるのであるが、其誤りなることは前章造物主の性質を論ずる所を看て自ら明かでムりませう。

第四は萬有神論です、是は世界萬物は皆な神の部分であるといふの說である、此說の謬妄なることは性質の全く相反對するものは決して同一なること能はずといふ定論を以て見れば甚だ明かである、例へば死物と活物とは全然反對の性質じやから石と人間と同一といふことは出來ない、其他有形と無形、有始と無始、有限と無限など其性全

く反對なるもので同一のものでない、ソコデ神の性は無遍にして其存在は絶對である、萬物の性は有限にして其存在は待對であるといふ事は第十一造物主と人間の關係の章に述べたる通りで、神と萬物は全く相反對する性質のものであれど決して同一とすることが出來ないといふは甚だ視易い道理である、然るに佛教や神道で人間が死ねば佛や神になるといふのは、此視易い道理すら分らない愚説ではムらんか。

第五無宗教者です、是は造物主のあることを信じても之に對する義務を盡すこと、即ち宗教を奉ずる必要はないといふのである、此説の誤りも亦造物主と人間の關係の章を見れば明かである。

以上五つの説の誤謬なることは、無智無學のものと云ふても明らかに分ることでムる、然るに斯る誤謬の道に入るといふは、態々眞の神を捨てるので、造物主に對して不忠不孝此上ないことでムる、死後の救かりは決して得られませぬ、聖書に曰く死後の救かり即ち幸不幸は人々の手許にありと、人間の壽命は草の葉に凝る露の如く、今にも風の爲めに零るかも知れぬ、されど最終の幸不幸が定まるのも今の間でムる、何うか諸君今世にも來世にも造物主に愛される樣に、片時も早く御心配なされんことを希望致します。

眞理之本原第一篇終

明治三十年一月十七日初版印刷
明治三十年一月二十日初版發行
明治三十年一月二十三日再版印刷
明治三十年十月二十七日再版發行

定價金五錢

筆記者　林壽太郎　甲府市太田町第百九十五番戸
發行人　前田長太　東京市京橋區新榮町六丁目卅五番地
印刷人　河本龜之助　東京市京橋區築地貳丁目二十一番地
印刷所　國光社印刷所　東京市京橋區築地貳丁目二十一番地

特50
965

真理之本原
1～3

国立国会図書館

020847-001-3

特50-965

真理之本原

ドルワール・ド・レゼー／述

1冊(91)
M30

ABI-0676